「加藤周一の学びの方法」研究の展望

福井　優

(1) はじめに

現在、立命館大学加藤周一現代思想研究センターでは、2022年度の「R2030推進のためのグラスルーツ実践支援制度」に採択された、「加藤周一学の確立を目指して」の共同研究が進められている。本稿の主題である「加藤周一の学びの方法」の解明も、その取り組みの一環である。

本研究の目的は、加藤文庫に所蔵されている、加藤の厖大な手稿ノートや対談・座談の記録といった一次史料を分析することによって、加藤が思想形成に当ってどのような文献や知識人から影響を受けたのか、またその広範にわたる知的営為を支えた学びの方法とはどのようであったかを、検証することである。換言すれば、アカデミーとジャーナリズムという二つの舞台に立ち続けるために、加藤が生涯にわたって続けた「稽古」の実態を明らかにしようとするものである。

そこで本稿では、本研究が市民との協同を重視していることを踏まえ、まずその社会的意義について提示したい。次に本研究の主要なプロジェクトである、加藤の代表作『日本文学史序説』執筆のために取られた手稿ノートの整理作業の経過報告を兼ねつつ、その加藤研究上の意義について述べたい。

(2) 本研究の社会的意義

「加藤の学びの方法」を研究することは、同時に加藤がどのような方法で世界を理解しようとしたのかを明らかにすることである。そして私たちはその解明から、現代社会を生きていくうえでも重要な示唆を得ることができると考える。

加藤の最大の理解者であった政治思想史家・政治学者の丸山眞男は、加藤の「知識人」としての特長を「加藤君のいいところは、ボン・サンス〔bon sens 常識〕というか、コモン・センスなんですよね」[1] と指摘し、その根拠を次のように説明する。

> 別に政治学をとくに勉強したわけじゃないでしょうけれども、普通の現代政治批判、たとえば何か事件が起こった。それについて政治的な評論を書いても、〝ピン狂〟っていう感じが全然ないわけ。ところが、文学者の政治評論は、文学として非常に高く評価されている人の〔ほう〕がピン狂のが少なくない。非常に意表外で独創的か、でなければピン狂……。もっともこの二つは紙一重かもしれない。これは日本の大問題なんですけどね。国際的にはまったく通用しないんですが、日本では政治評論としてきわめて大きな影響力をもっている。そうすると、加藤君は珍しい例外なんですね[2]。

ここで丸山は、加藤が文学者でありながら、政治から決して逃避せず、しかも日々生起するアクチュアルな政治的、社会的事象について、社会科学者にも通用する普遍的な言葉で、的確に論評できることを高く評価する。そしてそれは日本の文学者のなかでは「例外」であると指摘する。政治権力に批判的に対峙する知的共同体の形成、つまり専門分野を超えた学者と文学者・芸術家の横の連帯を求めた丸山[3] にとって、政治と文

学との理想的な架橋を体現する加藤周一という知識人は、注目に値するものであったにちがいない。

このような加藤の知識人としての在り方が遺憾なく発揮されているのが、1980年代以降の『朝日新聞』における時評の連載であっただろう。「夕陽妄語」は1984年7月から2008年8月まで連載されたが、折しもその時期は、冷戦の終結及び55年体制の崩壊に伴い資本主義対社会主義、保守対革新という旧来的図式が解体し、また「戦後民主主義」に対する否定的言説が風靡し、一方でアジア各地から日本の戦争責任を厳しく問う声が挙がるなど戦後史の転換期に当っていた。1990年代そして2000年代のこの混迷する思想状況・社会状況のなかにあって、加藤は「夕陽妄語」を通じて、日本の社会や政治、文化の現在地を、世界という空間と歴史という時間のなかに正確に位置付け、そこから将来への指針を導き出そうとした[(4)]。加藤は日本社会に対して、一貫して「コモン・センス」を示し続けたのである。

そして、この加藤の評論活動を支えたのが、第一に戦争体験に起因する「歴史、文化、政治」といった「私自身を決定する条件」を知り得る限り知ろうとする、「非専門の専門家」としての姿勢であり[(5)]、第二にその強靭な意志を発条とする、加藤の確かな学びの方法に裏付けられた、世界と日本に対する正確な現状認識であったにちがいない。現実の全体をできる限り正確に把握するために加藤がとった方法とは、海外の文献をも含めた徹底的な情報収集であり、それら複数の資料を突き合わせる多角的な分析であり、それに加えて重要なのは、日本文化史・日本思想史の手堅い研究によって培われた、透徹した歴史的視座に基づく対象への接近であった。この確かな学びの積み重ねに基礎付けられた現実を理解するための方法が、加藤の議論に強い説得力を持たせていたのである。

加藤は最晩年の2008年のインタビューでも、世界を変えるためには、まず「何が起こっているかということを」「はっきり理解しなければなら

ない」、「何が相手なのか、敵なのかを理解することが大事」と語っている[6]。加藤の生涯を貫くこの姿勢とそのためにとられた方法は、現代において、より求められているのではないだろうか。なぜなら加藤が現役であった時代よりも、現在の世界は深刻な混迷の様相を呈しているからだ。

SNS などの普及浸透は情報通信技術の高度化に拍車をかけており、将来その傾向が加速することは必然的である。さらに「ポスト・トゥルース」の時代と呼ばれるように、客観的な事実や真実を軽視する風潮が強まりをみせ、常識や事実に基づく多様な人々のあいだでの公共的議論が成り立ち難い状況となっている。

錯綜する厖大な情報を裁き、その玉石混交のなかから何が事実であるかを的確に見極め判断する力、また歴史に対する深い理解と洞察力の涵養は、現代に生きる私たちにとってほとんど必須の課題である。いま「加藤周一の学びの方法」の研究が求められる所以である。

(3) 加藤研究のさらなる高度化を目指して

本研究の第二の意義は、手稿ノートの分析などを通じた「加藤の学びの方法」の解明によって、多岐にわたる著作の成立の背景が詳らかとなり、加藤研究の実証的精度を飛躍的に高めることにつながる点である。つまり本研究は、加藤の巨大な学問・思想の世界を明らかにするうえで、基礎的な研究として位置付けられる。したがって本研究では、まず加藤の主著『日本文学史序説』執筆の準備の過程で取られた、手稿ノートの整理・研究に取り組む予定である[7]。なお将来的には、研究対象を他のノート類にも広げていきたい。

すでに加藤文庫では手稿ノートのデジタルアーカイブ化の一環として、2017 年度より「日本文学史」関連のノート類についても、鷲巣力、半田侑子、西澤忠志、狩野晃一、蛯子良風、筆者によって順次デジタルアー

カイブ化のための整理作業――具体的には翻刻やキーワードの抽出、ノートに記載されている参考文献の収集など――が進められてきた（「立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2671055100 で公開されている）。そこで本稿では、これまでの資料整理の成果を踏まえ、主に 2022 年度時点でデジタルアーカイブとして公開されている『日本文学史序説』の成立と密接に関係するノート類の概要について簡単に述べ、今後の研究のための一里塚としたい。

まずノート類の基本的な性格について。『日本文学史序説』は『朝日ジャーナル』で 1973 年から 1979 年にかけて 2 期に分けて連載され（第 1 期は 1973 年 1 月 5・12 日合併号～74 年 8 月 2 日号、第 2 期は 1978 年 1 月 27 日号～79 年 10 月 26 日号。途中休載あり）、筑摩書房から 1975 年に上巻、1980 年に下巻が刊行された。『日本文学史序説』に関するノート類は、主にわら半紙やルーズリーフ、原稿用紙に綴られたメモ書きや文献の抜き書きが中心であり、英語やドイツ語でタイプされたものもある。加藤自身が表題を付けたフォルダに収納されている。現時点でそれぞれのノートが書かれた正確な時期は不明だが、大半が、加藤自身が「蓄積の時代」と呼んだ、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学に准教授として赴任し、「美術科で東洋美術史を、アジア研究科で日本文学史を講じた」[8] 1960 年 10 月から 1969 年 8 月にかけてと推定される。また一部は、1974 年 9 月から 1976 年 8 月にかけてイェール大学で客員講師を務めていた時期に取られたと思われる。

次に掲げた 20 冊が、『日本文学史序説』に関わる主な手稿ノートである[9]。試みに各ノートの内容を踏まえたうえで、6 つの項目に分類した。またそれぞれのノートが、どのような著作に結実したのかについても右欄に示した。

『日本文学史序説』関連の手稿ノート

手稿ノート	主な著作
Ⅰ 時代別	
「〔日本文学史（古代）〕」(12)	『日本文学史序説』上〔以下、上・下のみ表記〕「日本文学の特徴について」～2章、初出73年（著4収録）
「〔日本文学史（平安）〕」(13)	上2～4章、初出73年（著4収録）
「〔日本文学史（中世）〕」(11)	上4～5章、初出73年（著4収録）／「世阿弥の戦術または能楽論」初出74年（著3収録）
「〔日本文学史（江戸）〕」(14)	上・下6～9章、初出74・78年（著4・5収録）
Ⅱ 近代日本文学	
「Japanische Literatur（MODERN）近代作家」(20)	下10～11章、初出78～80年（著5収録）
「近代日本文学 Notes」(412)	下10～11章、初出78～80年（著5収録）
「Japanese Literature（MODERN）Va」(18)	下10～終章、初出78～80年（著5収録）
「Japanese Intellectual History（MODERN）Vb 近代思想史」(19)	下10～終章、初出78～80年（著5収録）
Ⅲ 作家別	
「狂雲集註」(685)	上5章、初出73年（著4収録）／「一休という現象」初出78年（著3収録）
「〔新井白石〕」(64)	上7章、初出74年（著4収録）／「新井白石の世界」初出75年（著3収録）
「富永仲基」(484)	『三題噺』「仲基後語」初出65年（著13収録）／「富永仲基と石田梅岩」初出67年（著3収録）／下8章、初出74・78年（著5収録）
「富永仲基・懐徳堂資料」(340)	『三題噺』「仲基後語」初出65年（著13収録）／「富永仲基と石田梅岩」初出67年（著3収録）／下8章、初出74・78年（著5収録）
「le phénomène 荷風」(265)	「物と人間と社会」初出60～61年（著6収録）／下10章、初出78～79年（著5収録）
Ⅳ 思想潮流別	
「Buddhism in general」(21)	上、初出73～74年（著4収録）
「Japanese Buddhism Ⅱ 本朝高僧」(22)	上、初出73～74年（著4収録）
「徳川時代・儒」(23)	上・下、初出73～74・78～80年（著4・5収録）
「国学」(17)	下、初出74・78～80年（著5収録）
Ⅴ『日本文学史序説』の章節の構成	
「日本文学史序説 Notes」(15)	上、初出73～74年（著4収録）
「日本文学史序説下 Notes」(16)	下、初出74・78～80年（著5収録）
Ⅵ 日本の文学理論	
「Lit. Japonaise（Théorie）」(10) ※	上・下、初出73～74・78～80年（著4・5収録）

※「Lit. Japonaise（Théorie）」は、現時点ではデジタルアーカイブ化されておらず、2023年度に公開予定。

この６つのノート群には以下の特徴がある。Ⅰは「古代」「平安」「中世」「江戸」と時代別に、各時代の作家や文学作品、社会情勢についてまとめられており、Ⅱは近代日本の思想状況や文学者たちが対象である。Ⅲは作家別のノートで、「一休」「新井白石」「富永仲基」「永井荷風」という加藤が重要視し、単独で扱う論文を執筆している知識人についてまとめられている。Ⅳは「仏教」「儒教」「国学」と思想潮流別にまとめられている。Ⅴは『日本文学史序説』の章節の構成、各節の内容についてであり、執筆の直前に作成されたと考えられる。Ⅵは平安時代から近代までの日本の文学論・芸術論についてのメモ書きで、加藤が自身の文学理論を構築するに当って作成したのではなかろうか。

なかでも中核となるノートがⅠとⅣである。Ⅰは各時代別に主に物語や詩歌、随筆、戯曲（『万葉集』・『源氏物語』・『新古今和歌集』・近松門左衛門など）について扱う。一方で思想潮流別にまとめられたⅣは、Ⅰでは取り上げられていない、仏教・儒教・国学の思想家たちの著作（親鸞・道元・荻生徂徠・本居宣長など）について綴られている。このようなノート類の特徴は、加藤の日本文学史研究の方法論と対応していると考えられる。

そもそも加藤の日本文学史研究の独創性の一つは、「文学」の概念を広くとることで研究の対象を拡大した点にある。加藤は「これまでの日本文学史は、卓越した思想家の知的活動や一般民衆の生活感情をまともに考えに入れぬ文学概念に基いて書かれてきた。これは文学の簡単明瞭な定義を可能としたが、文学からその本質的部分を欠落させることにもなった」[(10)]として、小説や詩歌、随筆、戯曲といった狭義の文学作品のみで構成された既存の日本文学史の在り方を批判した。そして、外来思想の影響を強く受けた僧侶や儒者が主に漢文で書いた理論的著作のほか、土着的な大衆文学も研究の対象に加えることを主張した。この方法論が上記のノートにも反映しているといえる。したがって、このような広義の文学概念の導入とそれに基づくノート類の作成によって、『日本文学史序

説』において、『万葉集』から大江健三郎までの文学作品を「外来の世界観」「土着の世界観」「日本化された外来種の世界観」という3つの概念的枠組で論じ、仏教・儒教・キリスト教・マルクス主義との接触の過程で日本文学史（＝日本精神史）に現われた変化と持続の型を明らかにすることが可能となった。

それに加え加藤のノートの取り方の特徴として、基本的に作家や作品ごとに、①その作家の経歴、②関連する研究の整理、③原典の抜き書きとそれへの解釈、という形でまとめられている（具体的には「〔日本文学史(江戸)〕」で取り上げられている井原西鶴の場合、①14-25「SAIKAKU BIOGRAPHIE」、②14-26「〔広末保：元禄文学研究…〕」、③14-18「SAIKAKU置土産」など）。したがって加藤の日本文学史は、個別の作家や作品に対する綿密な研究に基礎付けられていると同時に、ノートⅥに見られる多様な文学理論の摂取による自身の理論的枠組の彫琢によって、瑣末主義に陥らない構造的な叙述が実現しているといえる。

これまで『日本文学史序説』は「日本文化の雑種性」(1955)、『羊の歌』(1968)、『言葉と戦車』(1969) と並ぶ加藤の主著でありながら、古代から戦後までの日本文学史を一望のもとに収める、あまりに壮大な内容であるためか、それに関する本格的な研究はあまり行われてこなかった。しかし近年、緻密な研究が相次いで発表され始めており[11]、今後の加藤研究の第一の課題が、『日本文学史序説』をどのように読み解くかであることは間違いない。「加藤の学びの方法」研究の一環として、今後それぞれの手稿ノートの作成年代の特定や加藤が参照している文献の調査、記されている内容の精査などによって、『日本文学史序説』の成立過程がより明かになることが期待される。それによって、『日本文学史序説』の方法論や背景にある加藤の問題意識が明瞭になるだけでなく、加藤の文学史・思想史研究と、同時代の日本文学・歴史学・宗教学・政治学といった様々な人文社会諸科学の学知との影響関係を検証することが可能になるだろ

う。また思想史研究を巡る加藤と丸山眞男とのより詳細な比較検討も試みたい。

加藤周一という巨大な山嶺への登攀は、まだ始まったばかりである。

註

(1)　丸山眞男「『加藤周一著作集』をめぐって――W 氏との対談」東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集　第三巻』岩波書店、2015 年、245 頁。

(2)　同前、252 頁。

(3)　丸山眞男「近代日本の知識人」『丸山眞男集 第十巻』岩波書店、1996 年、初出 1977 年。

(4)　1980 年代以降の加藤の時評「山中人閒話」や「夕陽妄語」については、成田龍一『加藤周一を記憶する』第五章（講談社現代新書、2015 年）に詳しい。

(5)　加藤周一『加藤周一著作集 14　羊の歌』平凡社、1979 年、初出 1967 年、404 頁。加藤は戦時下において、「いくさの性質をみきわめることに関心をもっていた」理由を次のように推測する。「社会の進んでゆく道が、そのなかに情容赦なく私をまきこんでゆくだろうということに、疑いの余地はなかったし、私は私に働きかけるものの全体を、理解したいと願っていたのであろう」（同前、166 頁）。この加藤の態度は、生涯にわたり堅持された。

(6)　加藤周一『私にとっての 20 世紀――付　最後のメッセージ』第 6 章、岩波現代文庫、2009 年、299 頁。

(7)　加藤の手稿ノートの分析については、鷲巣力の先駆的な研究がある。鷲巣は加藤のノートの取り方の特徴として、第一に「日本の原典について「ノート」に取るときには、英語、ドイツ語、フランス語のいずれかに翻訳し、註釈を加える」こと、第二に「対象を、たえず全体的に把握し、しかるのちに、そのなかの小さな問題について掘りさげていくという思考

方法」が貫かれていること、第三に「原典主義」の3つを挙げている（鷲巣『「加藤周一」という生き方』筑摩選書、2011年、37〜48頁）。

(8)　加藤周一「『羊の歌』その後」鷲巣力編『加藤周一著作集23　現代日本私註・『羊の歌』その後』平凡社、1997年、391頁。

(9)　ここで挙げたノートのほかに、デジタルアーカイブとして公開されている「日本文学史」関連のノートに、『日本人の死生観』上下（岩波新書、1977年）のために準備された「鷗外」（591）、「〔正宗白鳥〕」（547）がある。また「〔徳川〕」（486）は1960年代に日本文学史研究と並行して行われた日本美術史研究に関わるノートであり、「斎藤茂吉1882–1953」（106）は「斎藤茂吉の世界」（『近代の詩人3』潮出版社、1993年）執筆のために取られたと思われる。2023年度も「Lit. Japonaise（Théorie）」を含めた「日本文学史」関連の手稿ノートの公開が控えており、それらを踏まえ研究を更新していきたい。

(10)　加藤周一「日本文学史の方法論への試み」『加藤周一著作集3　日本文学史の定点』平凡社、1978年、初出1971年、7頁。

(11)　近年の『日本文学史序説』についての優れた研究として、劉争『「例外」の思想——戦後知識人・加藤周一の射程』（現代図書、2021年）、岩津航「第五章　『日本文学史序説』とフランス文学史」（『レトリックの戦場——加藤周一とフランス文学』丸善出版、2021年）、鷲巣力「なぜ『日本文学史序説』は書かれたのか」（『日仏文化』91号、2022年）などがある。特に岩津は、加藤の手稿ノートも参照しながら、『日本文学史序説』におけるフランス文学史の方法論の影響について検討している。

（ふくい ゆう　立命館大学大学院文学研究科博士後期課程）